

## 松尾邦之助とパリ その2 ～狂乱の時代（承前）～

江 口 修

### 始めに

#### 邦之助の肉声そしてアルベル・カーン

この稿を準備中にわれわれにとって大きな二つの発見があった。まずは、ラジオ放送フランス・キュルチュールの番組に *Concordance des temps* という歴史教養番組がある。筆者もポッドキャスト配信を受けて保存しているが、その3月14日、アントワヌ・コンパニョン<sup>1</sup>を迎えての放送『第三共和政下のフランス文芸の普遍性』、*l'Universalité des lettres françaises sous la IIIème République*、で1938年1月ラジオ放送での松尾邦之助の声が流された<sup>2</sup>。若干緊張気味で少し固めの平坦過ぎる語り口ながら、声を持つ独特のリアリティー感覚に奇妙な感動を覚えつつ、そのフランス語を書き取った。最後の部分はネイティブに聞いて貰っても確証の持てる文章にはなっていない。以下仏語とその日本語訳を挙げておく。

C'est après la grande guerre européenne surtout, c'est-à-dire, vers 1920 que les intellectuels japonais se mirent à puiser une nourriture spirituelle telle que dans la littérature de l'art français. A ce moment-là, la place qu'occupait la langue allemande au Japon a été peu à peu remplacé par le français. De nombreux ouvrages littéraires français ont été traduits directement de français en japonais. Je cite, entre d'autres, les noms des écrivains français les plus familiers et les plus appréciés au Japoné: André Gide surtout depuis la publica-

tion de ses oeuvres, *les nourritures terrestres* et *Porte étroite*, dont notre ami Monsieur Sato a déjà raconté (parlé)<sup>3</sup>. Ensuite, nous connaissons d'une façon un peu à la japonaise, si vous voulez, la poésie de Mallarmé et de Paul Valéry, qui sont même pour les français extrêmement difficiles, mais les japonais, c'est possible de comprendre ou de saisir le sens...

日本の知識人たちが精神的な糧をフランス芸術とくに文学に求めるようになったのは、とりわけ先のヨーロッパ大戦後、すなわち1920年頃からであります。当時それまで日本においてドイツ語が占めていた地位が徐々にフランス語にとって代わられつつありました。フランス文学の多くの作品が直接フランス語から日本語に翻訳されるようになりました。日本で最も親しまれまた最も評価されている作家の名前を挙げることができますが、就中、アンドレ・ジッドはその『地の糧』、『狭き門』の出版以降ひときわ抜き出ていますが、佐藤氏がすでに述べられているとおりであります。その後、どうでしょうか、多少日本的なやり方ではありますが、マラルメとポール・ヴァレリーの詩を知るようになりました。この二人はフランス人にとってさえはなはだ難解ではありますが、日本人にもなんとかその言わんとするところを理解あるいは捉えることはできるのではないのでしょうか。

コンパニオンは最近のフランス新大統領による対外文化政策の方針転換について、シラク前大統領までかろうじて続いていた良き伝統つまり第三共和政下で培われた「長期戦略」に立った対外文化政策、基本的には隣国ドイツや英国との影響力争いであって優位に立つことが肝心ののだが、性急に結果を求めず、いつかフランス語・フランス文化が世界各地に根付き開花するのを待つという戦略が一挙に失われようとしていると警鐘を鳴らしている。この良き伝統の生きた証言として松尾の言葉が採られているのだ。もちろんこ

のフランス語・フランス文化の伝播はヨーロッパ近代国民国家間の競争の一形態で、その世界支配幻想を見逃してはならないのだが、フランスがとった戦略はそういった毒の部分をかなり中和する役割を持っていたとも言えるだろう。ちなみにコンパニオンはこの長期戦略を支えた格好の制度としてアリアンス・フランセーズ<sup>4</sup>を評価している。この長い目で見るという基本姿勢が、今日、成果主義という短期戦略に転換させられ、実績の出ない部分には容赦ない予算カットが加えられるようになってきたことを憂慮している。もちろん、17世紀以降フランスの文芸が普遍性を持ってヨーロッパをリードしてきたその財産が第三共和政下でのこの文化戦略を支えていることも見逃してはいない。そして1900年のパリ万博が象徴するように、科学技術面でも先端に立ったフランスは、科学技術そして文化の普遍性を謳うにふさわしい立場にあった。そしてパリは世界中から才能を集め、一大コスモポリタン都市として輝いたのであり、邦之助はまさにその最後の輝きの真只中にいたのである。ちなみに、当時在仏日本人男性の多くはその名前の先頭2シラブルをとって名乗るのが普通であったようだ。コンパニオンも「クニ・マツオ」と呼んでいるし、30年代パリで出版された書でも kuni Matsuo と名乗っている。渡辺一夫も「カズ」と呼ばれていた。

もうひとつの発見は映像である。BBC 製作のドキュメンタリー番組「奇跡の映像、よみがえる 100 年前の世界」が評判を呼んだが、その第 10 回放送「よみがえる 100 年前の世界——カーンが見たニッポン」<sup>5</sup>を見ていて驚いた。邦之助が新聞界と繋がりを持つきっかけとなったフランスでの日本皇族の交通死亡事故の、あの北白川宮殿下<sup>6</sup>のご家族が映像としてよみがえっているのではないか。しかも南仏のカーンの別荘<sup>7</sup>で遊ばれるシーンのナレーションは「数週間後、フランス国内で自動車事故のため亡くなりました」と結んでいるが、それはすなわち 1923 年まさに邦之助最初の渡仏直後の出来事なのだ。だが驚きはこれだけではない。たしかカーンに関する言及があったはずだといろいろとめくっていると、あった。最近話題のウィキペディアも顔色なから

しめるほどの紹介記事ではないか。

アルベール・カーン氏のことであるが、わたしがパリで編集した「フランス・ジャポン」誌第三十二号（一九三八年八月）を見ると、パリ時代にわたしの秘書だった、アルフレド・スタインがまだ元気そうなアルベール・カーン氏に、庭の中でインタビューしている写真が出ている。

（中略）

一九六九年の夏、パリから戻ったわたしは、有楽町に近いイタリア料亭で、フランス人の唯一の旧友マルセル・ジュグラリスと昼食を共にしたが、マルセルは私にいった。

「パリの日本庭園のことでは君と同感だが、この庭をつくったアルベール・カーンという人物はいつか君の努力で世に紹介してもらいたいと思う。（中略）

ともあれ、今度、パリに行ったら、元駐日大使デンヌリー氏に逢って下さい。デンヌリーは、いま国立図書館長であり、かつてカーンに協力した人物だけに、カーンのことはよく知っているし、図書館にはおそらくアルベール・カーンに関する多くの文献書類があるはずですよ」と。

（『風来の記』、1970年、読売新聞社、pp.315-317.）

翌年70年にデンヌリー国立図書館長<sup>8</sup>さらにボアテル、オー・ド・セーヌ県知事<sup>9</sup>に会い「フランス側の思わぬ積極的協力を約されて」（同上、p.317）帰国した邦之助だが、惜しいかな75年に鬼籍の人となり、それと同時にカーンに関する日仏の協力も沙汰止みとなったようだ。だが、その後カーンの映像コレクションと庭園は整備され、現在では県立ながらもフランス美術館・博物館連盟のひとつとして評価は高まる一方である。もし彼が企図した日仏協力が実現していたなら、イギリスBBCではなく日本の放送メディアがこの番組を作っていたかも知れない。前置きが長くなったようだが、松尾邦之助の波乱万丈なパリ時代の後半をたどる上でも、カーンの残した映像と庭園

が語りかけてくる二十世紀前半の希望と混乱と絶望が交錯した世界は貴重である。アルペール・カーン博物館をインターネット上の俯瞰図でたどりながらスポットごとの写真を見ていると、彼が夢想した平和のための映像による世界探訪の構想がようやく実現されつつあることが実感されるが、すべての人々にとって、こうした情報がストレートにトランスパランなものとしてアクセスできるようになるのはいつのことだろう。ずいぶんと前書きが長くなってしまった。そろそろ、松尾邦之助の三段跳びの二段目を辿ることにしよう。

## 一時帰国と新聞記者への道

松尾が読売新聞社員になったいきさつを語るときに、まるで常套句のようにして用いられる言い方がある、すなわち「Y（読売）新聞のパリ文藝特置員という妙な肩書きを貰い、辻潤の後任として、フランス文學通信を初めてから」（傍点原文ママ）<sup>10</sup> というフレーズである。ちなみに辻潤についてあたってみると、次の一文に出会った。

私は自分の洋行をなにか特別な意味に考えたくはないのだ。今まで日本のあちこちを歩きまわった延長だと考えたい、至極アッサリした気持ちで出かけたのだ。ただ困ったことには生まれて初めて「海外文学特置員」などという厄介な大任を負わされたことだ。<sup>11</sup>

辻潤のフランス滞在はほぼ一年、1928年の1月に出発し、翌年1月にシベリア経由で帰国している。行きは船旅だからほぼ1カ月かかると勘定すれば、11カ月弱の滞在となる。28年の秋には松尾が一時帰国することになるからほとんど半年ばかりの交流ということになる。当時邦之助は中西颯政の援助で印刷工房を構え雑誌の編集もあって日夜構わず働いていたが、経済的には常に危機に瀕していた。「工場クラブ」と自嘲気味に名づけたこの工房にはとこ

とん窮した武林夢想庵がときどきやってきていたが、夢想庵と辻潤は旧知の仲。そして前述の井沢が松尾に辻潤の紹介を兼ねた手紙を送ってきている。ほとんど街に出ることなくホテルにこもっていた辻潤に代わって伊藤野枝との間にできた長男まことさんが、幼いながらもクラブにあった自転車を乗り回して父との生活を支えた。二人と一緒に暮らしたのはこれが最初で最後だったという。前稿で書き漏らしたことだが、やはり伊藤野枝が辻潤を捨てて「走った」相手大杉栄もパリのメーデーに参加して物議をかもしたが、さすがの松尾も大杉とは直接会ってはいないものの、不法出入国での逮捕、ラ・サンテ監獄収監から強制送還までのことはやはり『風来の記』に記している。生来のアナルシスト辻潤とパリで個人主義を鍛え上げてきた松尾は短い付き合いながら肝胆合い照らす仲となる。そして後に取り上げるが、この辻潤はパリに来る林芙美子を「世に出した」一人であり、また読売の清水弥太郎も芙美子と深い因縁で結ばれている。そして井沢も読売に移り、パリの邦之助は人と人との出会いの一大中心となってゆく。

さて、辻がパリに着いた頃、松尾はようやく、パリのジャポニザンたちとの交流、とりわけ俳諧趣味の流行を見て取って、『其角の俳諧』<sup>12</sup>の出版に漕ぎ着けたところであった。この書の売れ行きは好調で松尾は少しばかりではあったが印税といえるだけの収入を得ただけでなく、出版記念会で一躍パリの私人ジャポニザンたちからヒーロー誕生と持て囃された。そして、この『其角』が取り持ったのが川路柳虹との縁である。

本屋のショー・ウィンドウに、わたしの紋付き羽織袴姿の写真が出、『キカク』が、たちまち八、九千部売れ、パリの記者仲間は、わたしのことを「キカク!! キカク!!」と呼び、フジタ画伯が、この訳本の表紙に漢字で『其角』と太字で書いたため、その漢字をそのまま刺繍にとった模様をチョニック（胴着）に付けたパリ女たちまで、オペラの大通りに現れたのを見逃さなかった。大袈裟に言えば、『キカク』で、わたしは、いささか“売れっ子”になったのだ。

このような時に、わたしの業績(?)を知った川路君は、帰国後、読売に「パリのクニ・マツオ」などという記事を出し、わたしを売り出してくれた。そればかりか、川路君は、わたしが父の危篤の報で、急に帰国した一九二八年、東京の電車の中で、たまたま逢った読売の文化部長清水弥太郎氏にわたしを紹介したのも、川路君であり、清水部長は、インパネス姿で、佇立していたが、「松尾さん、いつパリに戻られますか。帰られたら、うちの文化欄に文芸通信を、毎月、一、二回送って下さい。たのみます」といった。<sup>13</sup>

松尾の人生の大きな転換点である。しかも、「キカク」と呼ばれていた時期にわずか半年ほどだが、畏友、辻潤との出会いがあり、彼の後を継いで2代目「読売新聞パリ文藝特置員」となり、それからはとんとん拍子に出世の階段を駆け上る。31年には同紙パリ支局長を拝命する。だがそれは柳条溝事件から満州事変へと日本が暴走し始めた年であり、翌32年には国際連盟を脱退する。ここが松尾の特徴というか、良き欠点というか、日本の国内情勢の深刻さをそれほど感じていないことである。「黄金時代」の名残りいまだ漂うパリに居て、生来の楽天性が相俟って竜宮の浦島太郎となっていたとも言えるだろう。もうひとつ銘記しておくべきは、帰郷し父を看取ってから、近親者の紹介で地元の素封家の娘と結婚しパリへと帯同していることである。筆者は再入国の審査を有利にするために妻帯し特置員（これは「エージェント」あるいは「アジャン」とパスポートに記載できる）という肩書きを手に入れたという向きもあるのではないかと思っている。もちろん故郷の縁故者たちを安心させる意味もあっただろうが、この最初の妻は実に影が薄い。さて、正式に読売新聞の記者となってからも、松尾の翻訳出版活動はいよいよ盛んになる。1929年は岡本綺堂の翻訳『恋の悲劇』<sup>14</sup>、30年には『日本仏教諸流派』<sup>15</sup>、そして32年、倉田百三『出家とその弟子』<sup>16</sup>とオーベルランとの共同作業の絶頂期がやってくる。この時期の松尾の活動は四つに分類しておくことができるだろう。

- 1) 読売新聞パリ支局長, すなわちジャーナリストとしての活動
- 2) 1) から派生する仏政財界人との交流
- 3) 仏人作家, 芸能・文化人たちとの交流
- 4) 在仏日本人との交流そして訪仏著名日本人の接遇

日本に対する国際世論が厳しさを増す中で、しかし30年代前半はまだまだ余裕はあったようだ。われわれはこのうち、3)と4)に絞って松尾の活動を見ておこう。

## 仏人作家, 芸能・文化人たちとの交流

### オーベルラン補遺

ジャポニザンたち<sup>17</sup>との交流は松尾にとってもっともくつろげてしかも生産的なものであった。一生の友となったオーベルランとの共同作業はフランスにおける日本文学・思想研究上、いわゆる専門性から見ればいろいろと不備や誤謬を指摘することができるであろうが、ジャポニズムの言語表象系におけるひとつの頂点として位置づけしてよいのではないだろうか。ともあれ、商業ベースの出版ということではかなりの成功を取めた。二人の共同作業について本稿では、岡本綺堂の翻訳と『修善寺物語』の演劇興行のいきさつが、演劇人との付き合いの始まりという点で興味深く、また日本の流行作家を取り上げた例として、さらに日本の現代演劇初上演（歌舞伎はオデオン座ですでに上演されたことがあった）として記憶すべきだと考えて挙げておく。きっかけは以外にも関東大震災であった。

マーニュ婆さんは、(中略)どうした動機で日本に行ったのかよく知らない。が、大正十二年(一九二三)の関東大震災の時、東京にゐた彼女は家財を悉皆灰燼にしてしまった。某日本人の犠牲的な厚意で救われた彼女は非道く感激し日本からフランスに歸って來てから、仏教研究家に

なり、生活のためだつたらう、日本人會の食堂に廣告を出し、我々同胞へフランス語を教えていた。<sup>18</sup>

彼女の話で、ヴェルシニーという名のユダヤ系フランス人が日本の演劇を興行したがっているの、よいものがあれば紹介して欲しいというので、松尾は手許にあった山本有三、岡鬼太郎<sup>19</sup>、菊池寛、岡本綺堂などを読み返して、パリで受けそうなのは岡本綺堂と思った。綺堂作品のうち松尾が訳したのは、『俳諧師』、『修善寺物語』、『鳥邊山心中』と『切支丹屋敷』の四篇である。だが、『切支丹屋敷』が一番見込みありそうだというヴェルシニーの返事があつたきり、なんの音沙汰もなかった。この試訳が日の目を見ることになるのがやはりオーベルランとの出会いからである。

婆さんに連れられて行ったギメ博物館の茶の會で、知遇を得たスタインルベル・オーベルランと私との文學協力が、初められ、不知不識の間にマーニュ婆さんと疎くなってしまったからだ。オーベルランとは當時『其角』の翻譯を初めてゐたが、偶々二人で日本戯曲の話をした時、綺堂の四部作の荒筋を物語ると、オーベルランは、それは面白い、特に一幕物の『俳諧師』は、クラシックの国立劇場、コメディ・フランセーズにも向くと想うが、譯文を見せてくれないか、(中略)「孰れも色とりどりで面白い作品です。僕は個人的には『俳諧師』が傑作だと想ひます。ただ、親友の君だから無遠慮に云ひますが……」<sup>20</sup>

こうして訳文の彫琢を重ね、松尾が岡本綺堂から翻訳と演劇としての上演の許可を得て、コメディ・フランセーズでの上演を目指してこつこつと努力を重ねた。1926年にはオーベルランの奔走で万事順調に行くかみえ、「三部曲は『恋の悲曲』と題して、ストック社が出してくれることに」<sup>21</sup>になったが、それが『恋の悲劇』として結実するのは30年であつた。だが、演劇上演の方は、『俳諧師』がコメディ・フランセーズの戯曲審査委員会で合格とされ上

演目の中に入ったのだが、オーベルランの奮闘もこれが限界だった。それにしてもオーベルランの人脈というか実力は驚くべきものがあるが、エリートが社会を動かすフランスでは当然あってしかるべきだとはいえ、ジャポニザンという主流ではない立場の彼にしてみれば精一杯というところだろうか。とにかく禅にあこがれながら松尾のために一肌も二肌も脱ぐ、邦之助友達冥利につきるといっていいだろう。だが、コメディ・フランセーズでなかなか上演が見えてこないところに、突然日本大使館方面から話しが持ち込まれてくる。オデオン座で国際演劇祭が開催されることになり、是非とも日本も参加したいというのである。さらにオーベルランの努力はものかわ、『修善寺物語』なら受けるに違いないと、作品指定までされてしまった。だが、興行界は何処もいかがわしい輩が人の隙を常に狙っているところであり、しかも日本は国威発揚のためにあらゆる手段に訴えようとしていた。日本は金になると見たのか、厚顔を絵に描いたような大使館に出入りしたメーボンというフランス人がユダヤ人のアルベール・カームと組んで介入してきた。しかも「原作綺堂。メーボン、カームの改作品」<sup>21</sup>として松尾の訳業を無視して独占しようとしたのだ。だが、松尾の翻訳でしか理解していない二人は、改作であることを強調しようと、ことさら妙ちきりんなアイデアを盛り込んでみるがうまく行くはずもなく、やがて大使館もメーボンを利用したカームの策動に気がついた。公演の失敗は許されないが、かといって大使館が前面に出るわけにもゆかず、結局二人を邦之助に押し付ける形で、『修善寺物語パリ上演準備委員会』<sup>22</sup>が組織され彼は委員長に祭り上げられることになる。その結果、オデオン座座主ジェミエ<sup>23</sup>と出会うことになる。そのくだりを述べた松尾の文章は優れているので引用しておく。

サロンの片隅にゐた私は、柳澤氏の紹介で、初めて有名なジェミエと握手をした。日本人は、ジェミエを『パリの左團次』だなどと呼ぶしてゐた。六十の坂を越したらしいオデオンの座主ジェミエは沈痛な、而も熱情的な表情の男で、眉のあたりに強い線が流れてゐるが、瞳には聰明

な優しい光をたたへた好々爺だつた。ただ芝居道の荒仕事と、不規則な夜の生活の故か、引緊った彼の顔にも、どこか底知れぬ疲労の痕が覗かれた。

この頃、コポオの『ヴィユウ・コロンビエ座』一味は既に、一九一三年頃から約十年間フランス劇壇に、無打算の献身的努力をつゞけ、ルキ・ジューヴェ、サシャ・ギトリイ、ヴィルドラック、ジュール・ローメン、ピットエフ、リユゲポオ、デューラン、ガストン・パチイ……等々の巨星が綺羅の陣を張ってゐたが、『トパーズ』のマルセル・パニョルやナタンソン等ははまだ有名になつてはゐなかつた。かうした賑やかなパリ劇壇の百花園で、單身ヂェミエは、独自の立場を持って光っていた。ブリアンの親友だった彼は、獨善的な、保守主義の國立劇場の座主達の間ではむしろ革命児として觀られ、ユーマニスムと國際主義を鮮明な標語にし、フランスの民衆に、シェークスピアや、イブセンものを紹介していた。<sup>24</sup>

この後、台本の朗読会は成功裡に終わり、公演は本決まりとなったが、松尾の苦労はこれで終わらない。小道具、大道具等、実際の段取りとなると、パリにもそれなりの適任者が在住していたのだが、そこは日本をそのまま引きずって、遠慮というか序列、あるいはいわゆる「筋を通す」というべきか、日本でのしがらみがそのまま温存されていることに呆然とせざるを得なかつた。そこはフットワークのいい邦之助、なんとかくぐり抜け配役にまで漕ぎ付けた。この辺りの顛末はとても面白く是非原著に当たられたい。松尾の活写は旧字体の文章を越えて想像力を直に刺激してくる。

國際演劇フェスティバルの一環としての上演であったため、初演はコメディ・デ・シャンゼリゼで行われ、4日間の上演であった、「次の機会にオデオン座で」ということになったのだが、どうなったのだろうか。ともかく日本でも、パリでも大反響となったのだが、次の邦之助の言葉に結論は任せよう。

狙っているあの芝居のテーマは、或伊太利作家のものと同然だとパリの某文藝記者に云われた。この時初めて、オーベルランが『修善寺物語』よりも、綺堂の『俳諧師』の方が、パリの優れた識者を駭かしたろうと云った氣持が、よく分かった。『俳諧師』の静寂な凄味は、更に獨創的で、日本的で、デイドの所謂、「稀なものの持つ自然さ」であり、『修善寺』などとは比較にならない氣品を持った藝術品であると思った。<sup>25</sup>

大使館の官僚仕事の側面を持ったため、『修善寺物語』になってしまったことを嘆じつつ、この件について松尾はこう締めくくっている。

後になつてパリの小劇団『プチト・セーヌ』は『鳥邊山心中』の上演の準備をしてゐたが、戦争の為中止になり、ただラヂオ・ドラマとしてこれを數回放送してゐた。オーベルランは『心中天網島』はシェークスピア以上の傑作だと云つてゐた。<sup>26</sup>

この上演の後、秋に父危篤の知らせで帰国することになったが、オーベルランとの出会いとその後の共同作業について前稿では足りないと思ったので補遺的に述べておいた。この『修善寺物語』上演はパリの日本大使館との繋がりをいっそう深めるとともに、演劇界への人脈開拓へのきっかけともなった。オーベルランなくして松尾なし、松尾なくしてオーベルランなし、戦争なかりせばもっと豊かな大輪の花を咲かせたに違いない。

### シュールリアリストたち

ダダ、シュールリアリスという前衛運動にも関心を寄せていた松尾は、日本を代表するダダリストとして辻潤を挙げ、ヨーロッパのダダの創始者であるトリスタン・ツァラとの交流を望んでいたが、これは結局叶わなかった。彼の、フランスのハイカイ派等の影響でツァラも「俳諧」に興味を持っていたし、その詩作にも影響があったとする意見を紹介して置こう。戦後ダダ・

シュールレアリスム研究は日本でも飛躍的な深化を見せるが、こうした戦前に現場を見ていた日本人の意見にはあまり注意が払われていないような気がする。戦争による断絶は日本ではやはり深刻だ。フランス文学研究が官製アカデミズムにおいては継子扱いされていたため、研究の継続性ということではあまり問題は生じなかったが、それ以外の「戦前の否定」は無意識レベルにまで浸透しているため、条件反射的に無視してしまうところがあるのではないだろうか。

フランス俳諧派はヨーロッパの第一次大戦当時、五十名ぐらゐの俳人を集め、当時の『グランド・ルヴュ』とか『ヌーヴェル・リテレイル』等と云う雑誌や週刊誌が、ハイカイの新作を発表してみた。<sup>27</sup> 社会学者でエコール・ノルマル・シューペリアル校の校長ブーグレや詩壇の巨匠フェルナン・グレ等がこの俳人の仲間であったことも記憶に残っている。（中略）

このハイカイは、やがてフランスの新興詩に影響し、トリスタン・ツァラのダダイズムや、エリュアールのシュール・レアリスムの詩に表現され初めた。かうしてハイカイの持った形式上の簡素と思索の総合的単純化は、フランス人への大きな驚嘆であり、当時の一般フランス詩へ影響して行ったことは争われぬ事実であった。<sup>28</sup>（下線強調筆者）

「ダダは結局ダダにしか分らない」<sup>29</sup>、人間精神の様態の根源的あり方のひとつとしてダダを肯定する松尾にとって、余計なものを徹底的に削ぎ落とし、裸形の事象の現前を目指す俳諧は、虚飾に徹底的にノンを突きつけるダダの姿勢と当然ながら、共鳴するだろう。シュールレアリスムの詩人エリュアールの短詩と言葉の直接性もそうであろう。

わたしは、パリでモンマルトルにいたブルトンを訪ねて語りあったり、画家のアンドレ・マッソンや、ハンス・アルプのアトリエを訪ねて懇談

したが、彼らはみな旧ダダのシュールレアリストであり、ユキ・フジタと親しくした関係で、同じく旧ダダだったシュールレアリストの詩人デスノスにも逢ったが、デスノスを知ったのは、もう彼がシュールレアリスト仲間を去ってから数年後である。そしてアラゴンやバタイユにはついに邂逅の機会がなかった。いずれにせよ、シュールレアリストたちは、みな果敢なエスプリの革命家たちであり、いずれもニヒリスト的個人主義者ばかりであった。そのために、彼らのグループづくりなるものは、それ自体矛盾した、不自然なものであったと思う。<sup>30</sup>

このデスノスとの親交から、松尾も全訳を念願していたようだが、実現には至っていない。フジタとクニとデスノス、「ベルギー生まれの麗人ユキ」<sup>31</sup>をめぐる繰り広げられた愛憎と苦悩とそこから生まれて来る芸術についてはまた稿を新たに起こすべき題材であろう。邦之助が「パリでむさぼるように読んだ」<sup>32</sup>ダダ、シュールレアリスト達と接近するきっかけとなったのもやはり『其格の俳諧』であった。再渡仏後ジャーナリストとして多忙な日を送る中でも、関心を持った対象との交流のチャンスは逃さない、そして出来上がった交友関係はサービス精神旺盛に維持する努力を怠らない。しかも芸術家達の創造性の深みに迫ろうとする真摯さも忘れない。この一連の稿を起こす際に引いた鹿島茂の言葉「日本人にとってのパリ体験は、臨死体験に似ている」を超えた次元での邦之助の生き方ではないか。恐らく、辻潤やツァラと共通する「アナルコ・アンディヴィデュアリスト（無政府主義的個人主義）」、一切の出来上がった権威に寄りかかろうとしない強烈な個性を持った人間の強みであったろう。だが、それはパリでこそ許されたことなのだ。

### ジッドそしてヴァレリー

松尾は日本人ではジッドと最も親交を結び、手紙のやり取りをし、語り合った人間だろう。彼が第二次大戦中、帰国しそこねてトルコのアンカラからマドリットへとヨーロッパを逃げ回りながらもついにベルリンで預けておいた

トランクが灰燼に帰したとき、その中にはジッドからの直筆の手紙が数多く入っていたと言う。ジッドと知合うきっかけもやはりオーベルランがからんでいた。

我々が第一番に出版したのは、オーベルランの「アジア擁護論、アンリ・マツシスへの反駁」と云う単行本で、これはパリ紙に相當な反響があり、思へば、アンドレ・ゲイドの知遇を得たのもこの単行本の御庇であった。ゲイドはこの小本を汽車の中で読み、感激して私に面會を求めてきた。<sup>33</sup>

そして、一度話し合ってから後、ジッドからの手紙を受け取ったのは1931年の11月ということである。幸い灰燼に帰す前に『パリ素描』にこの手紙の一部が掲載されているので、ここにそのまま転載しておく。

Quel plaisir j'aurais à causer avec vous davantage, me sentant si bien compris par vous la parole que vous me citez: "Si vous rencontrez le Bouddha, tuez-le", trouve en moi de profonds échos. Je ne doute pas qu'il n'y ait ici, de même que dans l'évangile, de quoi bouleverser les notions communément et commodément admises. Je vous saurai grand gré de m'éclairer à ce sujet.

Veillez croire, mon cher Matsuo, à ma sympathie bien attendrie.

André GIDE<sup>34</sup>

「釈迦に会ったら、釈迦を殺せ」と言ってやった松尾の言葉にジッドは天啓を受けたかのように感じ入っている。まるで『田園交響楽』で盲目の少女が手術によって視力を得たときの述懐のようである。だが結局「人間の顔がこうまで憂いをたたえていようとは決して想像していませんでした」というとおり、視界が開けたとしても人間の問題は決して解決される訳ではない。ジ

イドの異様な登場人物は松尾にとって「つねに、わたしの求めていた理想像に近い存在であった」ため、松尾はジイドに辻潤のような、畏敬と親近感を抱いたようだ。ジイド論としては『自然発生的抵抗の論理 アンドレ・ジイドとの対話』（永田書店）がある。

さて、ヴァレリーだが、ヴァレリーとの機縁はドラマチックなものではないようだが、「凱旋門に近いヴァレリーの家」に二度ほど訪ねて語り合ったことがあるという。彼は、「ロマン・ローランと同じような静寂厳粛な表情をしていたが、わたしはロマン・ローランより以上に、先鋭な文明批評家として敬愛した」<sup>35</sup>と述懐している。また会談の中で「鏝一文にもならぬことに汗だくどく努力をする」<sup>36</sup>と文明を定義し、北斎をしきりと引用して東洋文明を賛美したという。このヴァレリー、邦之助の求めとあらば結構付き合ったようだ。これが次の林芙美子のパリ滞在へと話としては繋がって行く。林芙美子の歓迎会が開かれ、フランス側の代表格としてヴァレリーが出席しているが、松尾の仕掛けである。

## 日本人作家の接遇

### 林芙美子台風パリ席卷

本稿では30年代前半の日本人作家パリ来訪の代表として林芙美子を取り上げてみよう。林芙美子を松尾は読売新聞の文化部長清水弥太郎からの依頼もあって、なにかれと面倒を見ている。少し刺激的な述懐を紹介しておこう。

パリにいて、真っ白い肌の西洋女ばかりに接していたわたしは、たまたま会ったり、親しくするわが黄色人種の日本女性には、同胞でありながら、妙な異和（原文ママ）感を覚え、性欲を感じなかった。林芙美子が、読売の文化部長清水弥太郎君の紹介でパリのわたしのホテル・フロリドールに流れ込み、同じ宿に住んでいたのだから、日本に帰ったわたしに、「松尾さんは芙美子と関係していたそうですね」とからかう記者がいた。

だが、当時、わたしは日本人の女房と一緒にだったし、パリの美女どもに取り囲まれていた関係から、いかに物好きでも、芙美子に惚れて、うつつをぬかすほど初心ではなかった。<sup>37</sup>

問題発言といってもよいだろう。実に失礼な物言いである。だが、これは日本に帰ってからの松尾の特徴でもある。つまりサービス精神旺盛によるのか、誇張がつい過ぎてしまう。だが、たしかに「日本に帰ってから、板垣直子さんから、たびたび電話があり、『林芙美子さんには、パリで恋人があったと聴いていますが、相手の男は誰だったのでしょか』と訊ねられた」<sup>38</sup>という通り、芙美子パリ滞在の目的が恋ではなかったのかという詮索は盛んだった。渡辺一夫もうっかり巻き込まれてはと思ったのか、映画を一緒にしてコーヒーを飲んで話をしたくらいだと弁明したりしている。この恋人探しは今川英子の手になる『林芙美子 パリの恋』(中公文庫、2004年)の解説に詳しく、ほぼ結論がついている。外山五郎を追ってパリに行ったが、恋の成就是叶わず、生来のフットワークの軽さと多情さでいろいろと在パリの青年達を引きずりまわしながら、建築家白井晟一に出会って真剣に恋に落ちたというのが真相のようだ。

だが、本当に世間は狭いというべきか、松尾とパリで出会った辻潤こそ、芙美子の処女詩集『青馬を見たり』に序文を寄せ、彼女が世に出るのを手助けした人である。「彼女は十銭で僕とキスをした」とからかっているが、彼らは「南天堂」に集まっていた、ボヘミアンあるいはアナーキストグループの仲間でもあった<sup>39</sup>。そしてまだまだ貧乏新聞の「読売」であったが、そこに芙美子が原稿を売り込みに行ったとき冷たく対応したのが清水弥太郎であった。芙美子についてはまだまだ余談はあるのだが、それは他の機会にゆずりたい。最後に、邦之助の芙美子に対する感じ方を、大方が本音だろうとする「芙美子がぶつきら棒で、朗らかで、単純であったのを愛し、二、三日で旧知の人間のように親しめた」<sup>40</sup>という科白にさらにもうひとつ引用して補強しておきたい。

灰色の憂鬱な長〜い冬を越し、やっと春の近づくのを感じ、まだみんながマントォに包まれ、立去りかねた餘寒を怖れてゐる頃、パリのレストランの卓で、南佛から運ばれた許りの黄色い綿で作った様な、コンペトウ（原文ママ）形のミモザの花の甘い香が鼻を衝くと、急に明るい陽光を總身に浴びた様に甦った心地になる。ミモザの香はうららかに踊る陽光の軽い香である。林芙美子氏がこの花を好くので、度々押花にして日本にまで送ったことがあるが、シベリアまで行かぬうちに、この南欧の陽影をこめたミモザの芳烈な香はぬけてしまったことであろう。<sup>41</sup>

新聞記者駆け出しの頃、まだ文学青年「むささび」の名残ある名文であるし、芙美子さんの直情径行なところ、熱い魂が好ましく語られている。

## 結び

ここまで紹介してきたクニこと松尾邦之助、その交友振りから、いかにも立て板に水のフランス語を喋りそうな印象を与えたかも知れない。しかし冒頭で紹介した彼の肉声を聞く限りでは、たとえラジオ放送の収録で極度に緊張していただろうと推察するにしても、ご安心あれ、日本語ネイティブの宿命的な奇妙なアクセントが抜けていない。語学の授業で「失敗を恐れるな、どうせノン・ネイティブなのだから笑われても気にするな」と叫ぶわれわれはやはり正しいことを言っているのだ。みごとに同時代のフランスの文学者、芸術家、文化人、政治家たちと渡り合ってきたクニさんもちゃんとそのあたりは承知の上らしい。相手の言っていることをきちんと理解できれば、質問は自然にできあがるし、それが正鵠をついているかどうかは勝負だよ、とでも言いたげに、フジタのお呼びがかかればすっ飛んで行く。モンパルナスにかつての賑わいはないが、そんなクニを幻視させるだけのたたずまいはまだある。何度も言うようだが、日本における太平洋戦争前と後の断絶はひど過ぎる。クニが醜悪と断じた日本人の嫉妬心と「お上」意識だけは継続させな

ながら、繋ぐべきものをいとも簡単に捨て去ってしまったのではないかと今更ながら思うのである。昭和の研究で良いものが陸続と出ているので、筆者としてはこのクニの視点と実績からそれらを補強できれば幸いである。次稿では、その他の日本人作家との関係そしてジャーナリストの側面にも目を向けながら戦雲たちこめる 1930 年代末を見て行こう。

## 注

- 1 Antoine Compagnon：コレージュ・ド・フランス教授，米コロンビア大学教授。今年度日本学術振興会「外国人著名研究者招聘」枠により来日。中央大学（後楽園キャンパス）で開催された日本フランス語フランス文学会春季全国大会におけるターブル・ロンド，*l'Avenir de la culture française* においても，ほぼ同様の趣旨に基づいた発言をされている。
- 2 実は筆者はこの放送について実際のチェックを怠っていたところ，東北大学大学院文学研究科の今井勉准教授からモントリオール大に留学中の廣松勲君から連絡があったが，筆者が松尾について調べていることをご存知でわざわざお知らせ頂いた。ここにお二人に深く感謝する次第です。
- 3 ここは *dont* を使っている以上は *parlé* でなければならない。だが，この「佐藤」が誰なのか，同じ放送でしゃべったのであれば当時パリの研究者か文化人であると判断されるが，マラルメ，ヴァレリーであれば佐藤輝夫が最適人者かと思われるが，彼の留学は 1926～28 であり，気軽に洋行できる時代ではない。さらに調査が必要である。
- 4 *L'Alliance française*：パリに本部を置き，現在では 136 カ国に 1040 を越す協会組織を展開している。それぞれの協会はそれぞれの地域の法に則って独立した組織として設立され，パリのアリアンス・フランセーズの認証を受ける。正式に認証された場合にはフランス外務省の様々な支援を受けることができる。創立は 1883 年 7 月 21 日であるが，その目的は普仏戦争敗北によって痛手を被ったフランスの名誉回復のため，フランス語・フランス文化の世界的な伝播普及であった。設立準備委員会にはフェルディナン・ド・レセップス，ルイ・パスツール，エルネスト・ルナン，ジュール・ヴェルヌなどそうそうたる顔ぶれであった。ただし 2007 年にアリアンス・フランセーズ財団設立という制度的に大きな変更が行われた。
- 5 原題は *The wonderful World of Albert Kahn*, 2007, BBC. 第 10 回放送の原題は *Japan in colour*.
- 6 北白川宮成久王。1921 年「北伯爵」の仮名でフランスに留学。23 年ノルマンディーのペリエ＝ラ＝カンパーニュ村付近で自動車を運転中ポプラの大木に激突，助手席の仏人運転手と王は即死。この事故現場に急行したのが，佐藤朝山が投宿していたホテルで知り合った井沢弘の同僚記者鴨居と松尾の二人だった。これは特ダネとなり，井沢との長い付き合いが始まった。ただし当時井沢は読売記

- 者ではなく、大毎系（毎日新聞）の記者であった。ちなみに朝日新聞の当時のパリ支局員町田梓楼は東京外語の同窓だが南仏に出かけていてこの特ダネを逃した。『風来の記』、「神様？仙人？井沢弘のこと」p.30～参照。
- 7 別荘はカップ・マルタンにあったが、ここには二十世紀を代表する建築家ル・コルビュジエが1952年「休暇小屋」を建てている。
- 8 Étienne DENNERY (1903～1979) 高等師範学校卒。極東の政治経済問題の専門家として教職に。ドゴール將軍との関係深く、41～44 にかけて「自由フランス」の情報局長。戦後は外交官として活躍、1961 年駐日仏大使。64 年帰国後 Julien Caen の後任として国立図書館長（75 年まで）。
- 9 Claude Bortel 1960 年より Hauts de Seine 県知事。
- 10 松尾、『現代フランス文藝史』（富岳本社）1947, p.1. この「序」で松尾は「筆者は、辻潤の様な讀書家でもなく、文學史を書く様な書齋の學者では尚更ない。ただ市井の新聞人として働き、十八年間パリで二つの佛文文學雑誌を編集していた関係から、多くの作品を讀むと云うより、むしろ作者達と直接親しくしていた。」（同上、傍点筆者）。
- 11 『辻潤著作集1 絶望の書』（オリオン出版社）1969 年より。
- 12 *Les Haikai de Kikaku*, traduit par Kuni Matsuo et E. Steinilber-Oberlin, Paris, G. Crès. 1927.
- 13 松尾『風来の記』（読売新聞社）1970, pp.30-31.
- 14 Kido OKAMOTO, *Drames d'amour*, traduction par Kuni MATSUO et E. STEINILBER-OBERLIN, Paris, Stock, 1929.
- 15 STEINILBER-OBERLIN E., *Les Sectes bouddhiques japonaises - Histoire - Doctrines philosophiques - Textes - Les sanctuaires* 1930, G. Crès, Paris. 松尾は共著者となっている。
- 16 KURATA Hyakuzo, *Le prêtre et ses disciples*, traduction par Kuni MATSUO et E. STEINILBER-OBERLIN,, Paris, Rieder, 1932.
- 17 ざっと名前を挙げておくと。ハイカイ派ではルネ・モオブラン（原綴不詳，調査中），ジュリアン・ヴォーカンス（Julien Vocance），P. L. クーシェ（原綴不詳），そしてソルボンヌの日本文学教授ミシェル・ルボン（Michel Lebon?）など。
- 18 『フランス放浪記』（前掲），p.79。
- 19 岡鬼太郎（おにたろう，本名は嘉太郎，1872-1943）慶応義塾で福沢諭吉の教えを受け 1893 年福沢が創刊した「時事新報」に入社。その後報知新聞に移り，鬼太郎のペンネームで歌舞伎評を書く。岡本綺堂と親しくその影響で小説や戯曲を書いた（フリー百科事典『ウィキペディア』参照）。ちなみに洋画家岡鹿之助は彼の実子。
- 20 同上，p.81。
- 21 同上，p.85。
- 22 同上，p.88。当時の駐仏大使は石井菊次郎で退官直前であった。
- 23 松尾はジェミエと記しているが，仏語綴りは Firmin GÉMIER である。1922 年から 30 年まで座長を務める。本名 Firmin TONNERRE。国立民衆劇場を 1920 年パリで立ち上げた。
- 24 前掲書，p.89。列举された劇作家や俳優の中では，とくにマルセル・パニョルとは親交を結んだ。出会いのエピソードが面白い。「パニョルとは妙な偶然の縁で知合になった。ル・デュールナル社の食堂で筆者がめしを喰つてると隣にゐるフ

ランス人の男女が、トパアズやファンニイの話をしている。私も何の気なしに「トパアズ」の話の中につりこまれて行くと、男は「オイ君、卓を一緒にして喰はうじゃないか」と云つたので、彼らの方へ席を移した。(中略)その男がパニョルである。相手の女は、ファンニイに扮して有名になった女優のドマチスである。「トパアズ」を上演しないなあ、トルコと日本だけだと云い出し、パニョルは「日本でトパアズを上演しても分かるか」と筆者に訊ねた。「トパアズ」の上演翻譯権を偶然に貰ったのはこの席だった。」(松尾『巴里素描』、岡倉書房、昭和九年、p.166)この最後の「上演翻譯権」の話は本当らしく。パニョルが「トパアズ」を映画化したのが1930年であり、翌年の31年には永戸俊雄と松尾の共訳で新時代社からシナリオが翻訳されている。永戸俊雄はその後パニョル翻訳の第一人者として活躍。その後は筆者の恩師の一人である佐藤房吉先生が自伝的作品については翻訳されている。演劇上演は同年6月25日から7月8日まで帝国ホテル演藝場で劇団新東京(演出：青山杉作、出演：友田恭助、東山千栄子)が行っている。

25 同上、p.109。

26 同上、p.110。

27 雑誌名はそれぞれ《La Grande Revue》と《Les Nouvelles littéraires》前者の寄稿者には A. Gide, George Bernard Shaw, Jean Giraudoux, Alain Fournier 等が並ぶ。後者は Maurice Martin du Gard 編集でラルース社が1922年に発行し始めた。松尾の「第二次世界大戦當時」というのとは若干時期がずるが、問題とするには当たらないだろう。

28 同上、pp.196-197。ちなみにブーグレとは Célestin BOUGLÉ (1870-1940) のこと、デュルケームの弟子で第三共和政下の国立大学制度を思想的に支えた象徴的人物。フェルナン・グレは Fernand GREGH (1873-1960)。

29 松尾、『現代フランス文藝史』(富岳本社)、昭和22年、p.118。

30 『風来の記』(前掲書)、p.58。

31 同上、p.59。

32 同上、p.67。

33 『フランス放浪記』、(前掲書)、p.60。

34 『パリ素描』(前掲書)、pp.149-150。

35 『風来の記』(前掲書)、pp.119。

36 『パリ素描』(前掲書)、pp.151。

37 『風来の記』(前掲書)、pp.146-147。

38 同上、p.149。

39 これについては川本三郎の『林芙美子の昭和』(新書館、昭和15年)に詳しい。同書と関川夏夫の『女流』(集英社、2006年)を併せ読むと、この時代の東京が見事に浮かびあがってくる。昭和研究は新時代を迎えつつあるあり、戦前/戦後という断絶を超えてひとりひとりの人間が生きた実相に迫りつつある。

40 『風来の記』(前掲書)、pp.147-148。

41 『巴里素描』(前掲書)、p.37。